に語つた所によつて、河南省北部黄河北岸、懐慶附近の支那側及び日本側陣地後方で組織的な醫療隊が活躍してゐる事實が明かになつた。即ち懐慶の傳道病院は數百名の青年男女を訓練し、基礎的な應急手當法、輕い病氣に對する簡單な治療法を教へたのであるが、六箇月間の猛訓練後醫者の證明書こそ持たねいが、全員は實用的な知識を備へるに至り支日戰線後方の村々に這入り、醫療班を組織した。全員輕い病氣や怪我の手當は出來たし、重病者に出遭つた時には專門醫に診させるため教會病院へ患者を運び込んで來た。この組織は藪醫者や漢法醫に代つて小村落に充分な醫療手當を施した。養成された者達は皆習つたことの限界を知つてゐるので職業として醫術を行ふために他の大きな町へ移ることは欲してゐない。之等青年はたとへ開業しても他と競爭することの出來ないことを知つてゐるので、彼等は村落に留り、部落の缺くべからざる存在となつてゐる。この方法は既に支那軍の衛生隊でも採用せられ、青年男女を數ケ月訓練してから衛生隊に組織してゐるが同氏は西支の他の區域に於ても同樣な組織を設けることを希望してゐる。以前同氏はいつでも支那側と日本側の間を旅行することが出來たが、最近の旅で日本側にもう歸るなと命令せられたので「日本軍が占領した懐慶にはよう歸れぬ。數名の日本士官は自分に對し、『我々は日本へ歸ることを期待してゐない』と語つたが、其の多數は以來支那側遊擊隊に殺されたから、彼等の言は正しかつた」と語つた。

105

極秘

重慶支那語放送　（臺灣總督府交通局遞信部聽取）

五月十五日

一、上高十四日電

我南昌攻擊部隊は一昨日鴉鳩嶺の奪回戰に於て敵の大隊長鈴木考を射殺した、殘敵は猛狽武器彈藥及文書多數を遺棄して敗退したので全部を鹵獲した隊長の部下に對する訓戒文を檢するに、近來前線の將兵は職責を怠るもの多し、厩當番が歩哨に對する連絡不完全のため常に華軍の襲擊を受けて軍馬損傷使用に堪へざるもの多し、其他種々の職責にある將兵は萎靡敗類軍令を見ること鴻毛の如く軍人の身分を忘れたるものの如し、斯くの如き事が續くことは憂慮に堪へず故に斯くの如き反國家的行爲に對して本大隊長は茲に戒告を與へる今後若し繰返すときは必ず懲罰令、或は陸軍刑法に照し事の輕重を不問處斷する外交書を以て市町村長、在鄕軍人會及其父兄に通知し永久に故鄕に歸る事が出來ない樣にする等の語があつた、之に依つて敵將兵が故鄕を思ひ戰爭を厭ひ志氣沮喪したること及敵軍隊が下級將兵を壓迫することが如何に深刻であるかの一班がわかる

一、國際反侵略運動大會中國分會は世界人士に更めて敵の暴行を明瞭にし同時に對暴日制裁を

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

促進する見地より特に數次の敵機重慶爆撃の實狀をぜひ示バ反侵略總會に報告特別に敵人の卑劣手段を指摘し事實は却つて戰ふに從つて愈々弱きを表現したるもので此種の手段は何等の效果なきのみならず我國民衆に對して殘虐の事實を更に深く認識せしめ仇敵の氣慨を一層高揚しあくまで抗戰するの決心を愈々固くするのみである

分會は特に總會に電報を以てバリーの無防備都市爆撃反對大會の決議案の實施と同時に列强各國に對し日本に有効なる制裁の促進を要求した

一、中外の記者は本日外交部に王龍惠部長を往訪、敵人の南支に於ける行動の發表を請ふた、王部長は談話を發表して曰く

鼓浪嶼の日本海軍は元鼓浪嶼工部局の一員で目下日軍は鼓浪嶼の租界に上陸したが事前に工務局に通知せず、其意は列强の極東に於ける眞意を打診せんとする態度で之は日本が上海の共同租界を奪取せんとし其他之に似たる初歩の行動で第三國の權益を侵略したことは已に一回に止まらざるは今日に至り愈々明白になつた

卽ち列强の中國に於ける利權が極東より排除せらるるを欲せざるときは侵略者日本に對して制裁及報復の手段を採ると云ふ。

五月十四日

一、某々地十三日電話

一週間以來隨縣棗陽の我軍は敵藤田、荻州、藤江等各部隊からなる大兵團と激戰を交へ、我將士は奮勇出擊して敵陣を數段に切斷して後別個に之を包圍痛擊し本日拂曉に至り合計敵一萬三千八百餘名を殲滅したが其の屍體は至る處に滿ち流れ出た血は河となり險要なる大洪山脈一帶を縱橫に走つて居る谷間は實に頑敵の身を葬むるに最も好適なる場所である。

一、山西某地十三日電

山西省に駐屯せる敵師團長牛島は人となり溫厚篤實にして少莊軍人の跋扈に對し素より反感を抱きつつあるが爲敵梅津の嫌忌する所となり久しきより彼を排除せんとするも機會がなく最近牛島が指揮した部隊は山西省南部の作戰に於て屢々我に痛擊され死傷多數の爲殆んど全滅の狀態に陷り之が爲昨日梅津より酷ぐ譴斥され彼ら軟弱無能にして職責を果し得ずと稱して軍隊に之を免職する樣電を以て申請したが牛島は憤激の餘り宋鎭に於て所屬部隊を集合して訓話を爲し軍部を痛罵して已まず其の語は甚だ悲壯にして將兵は何れも涙を落し梅津は之を聞き大いに怒り人を派して彼を監禁して本國へ押送せんとしてゐると云はれる

内閣情報部五・一八　情報第一號

―英紙伊皇太子と黨首腦部との不和を說く

同盟來電―不發表

ロンドン十六日發同盟

十六日付の　ヨークシヤー・ポスト紙はイタリア皇太子ウムベルト殿下とファシスト黨首腦部との不和は最近に至つて愈々深刻化したと左の如き報道を掲載してゐる。

「最近頻に傳へられるウムベルト伊皇太子とファシスト黨首腦との軋轢の噂に關してイタリア官邊では終始絶體的否定の態度を持してゐる、然し右の否定にも拘らずイタリア政府高幹部間に軋轢の存在することは飽く迄事實である、ウムベルト皇太子は最近愈々ムツソリーニ首相と意見を同じうすることの難きを覺つた樣である、蓋し、ウムベルト殿下はイタリア國民の大部分と同樣ドイツに對して深刻な憎惡を有し、樞軸政策の論理的歸結として考へられる所のものに對して重大な不安を感じてゐるからである、ウムベルト殿下、ムツソリーニ首相の不利が深刻化してゐる證據は最近ファシスト黨首腦部によつて行はれた忠誠の誓約に於てエムヌエーレ三世並に祖先への忠誠が行はれたにも拘らず、その後繼者に對する忠誠には何ら言及されなかつたことにも見られる、尙ウムベルト皇太子並に同妃の長らく延期されてゐたベルギー御訪問は最近實現の運びとなる模樣である」。